



Title	詩人が自負する詩の力 : ShakespeareのSonnetsをめぐって
Author(s)	大森, 文子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2026, 2025, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106332
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

詩人が自負する詩の力：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって

大森文子

1. はじめに¹

本稿は近年の言語文化共同研究プロジェクト報告書掲載の筆者の論文（大森 2021, 2022, 2023, 2025）に続けて、Shakespeare の *Sonnets* のレトリックを考察するものである。大森（2025）は、美しい青年への愛を描いた 1 番から 126 番までの詩群を対象にし、青年と語り手の両方が比喻表現で描写されている詩を拾い上げ、二人の愛憎相半ばする複雑な関係と、それゆえに語り手が味わう喜びや悲しみ、苦しみ、恐れ、相手を守り抜こうとする矜持といった様々な心情がメタファーの観点からどのように捉えられ、表現されているのかを考察した。本稿で着目するのは、語り手が青年への愛を綴る自らの詩について自らどのように評価しているか、詩を書く目的の達成のために語り手が言葉の力をどのように認識し、詩作を通してその力を発揮していくかである。

筆者は 2025 年 10 月、恩師である河上誓作先生（大阪大学名誉教授）から指名をいただき、同じく恩師である成田義光先生（大阪大学名誉教授）を追悼する鼎談に登壇する機会に恵まれた。² 学生時代に受けた成田先生の学恩について語る中で、数十年前の授業の記憶をたどりながら、時を経て褪せることのない恩師の言葉の力について、考察を深めることができた。それを契機として、あらためて言葉の力について、長期間研究を続けている Shakespeare のソネット集に収められた詩作品を通して考えてみたいと思ったことが本稿執筆につながった。

本研究では、154 篇のソネットのうち青年への愛を描いた 126 番までの詩を対象とし、若さと美しさの盛りにあってもいつか老いて死にゆくことを免れられない青年の命を惜しむ語り手が、自らの詩の力で死すべき運命を覆し、永遠不滅の命を獲得しようとする、そのひたむきな取り組みについて、メタファーの観点から考察する。³

2. 自意識の揺れ

Sonnets の詩集の中で、語り手を指す 1 人称代名詞 “I” や “me” が登場するのは 10 番以降である。10 番では、いつまでも独り身が続ける青年に対し、「私を愛しているなら、もう一人のきみをつくってくれ、子供らや、きみのなかで、美がいつまでも生きるように。」(Make thee another self for love of me, / That beauty still may live in thine or thee. (Sonnet 10, ll. 13-14)) と結婚を強く勧め、自らが青年の未来を案じる人間であることを表明するとともに、“for love of me” により、青年と語り手の愛情関係を明示している。これ以降、語り手は自らを詩集の主要登場人物の一人として頻出させ、自らを描写の対象とし、青年と自らの間の愛の心情とそのもつれを詳細に描いていく（大森 2025 参照）。

登場人物として描かれる語り手の役割は、青年を讃える詩を書く詩人である。渡辺（2025, pp. 28-32）は、*Sonnets* において “song(s)”、“line(s)”、“verse”、“rhyme” が “my” や “this” との連語として頻出し、「自らの詩がテーマとして連続して謳われている」ことを指摘し、「詩人とそのソネットは、神に等しい美青年を称賛する臣下の立場から、相手の美徳や不徳も含めて一体感を獲得した詩人が、その二人の美貌や詩才を残す記念碑として自らのソネット集について歌う、つまり詩についての詩、メタポエムの形に変化していく」と述べる。⁴ この指摘からもわかるとおり、本詩集では、語り手自身が自らの詩についてどのように考え、評価しているのかが随所に現れている。詩集の中でそれら一連の詩を連続体として読んだ時に気がつくのは、語り手の詩人としての自己評価に揺れがあることである。⁵ 自らの詩に初めて言及し、“rhyme” という語で指示するのは

¹ 本研究は科学研究費補助金（基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 III」(研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹)の助成を受けている。

² 「鼎談 成田義光先生を偲んで」阪大英文学会第 58 回大会（2025 年 10 月 25 日、於 大阪大学）。司会：河上誓作（大阪大学名誉教授）、パネル：柏本吉章（神戸松蔭大学教授）、大森文子（大阪大学教授）。

³ 本稿で取り上げた *Sonnets* の引用は Burrow ed. (2002) を参照した。本稿の引用の下線部はすべて筆者による。ソネットの詩行の日本語訳（鍵括弧に入れて引用）は高松雄一訳（『ソネット集』岩波文庫、1986）による。

⁴ さらに、渡辺秀樹名誉教授は本共同研究プロジェクト報告書に掲載されている 2026 年の論文で、詩人が自分の詩文・詩行を指す名詞として用いている rhyme, verse, number(s), line(s), song(s) の 5 種について、詩の中での配置や意味、これらの名詞に付く形容詞の意味について詳細に論じている。

⁵ 本稿では、語り手の自己評価の揺れ、詩人としての技量についての自己否定や自己肯定などを考察していくが、本稿で言う「語り手」、すなわち詩の中で “I” や “me” が指し示す人物は、Shakespeare その人ではない（たとえ語

16 番であるが、詩人としての自分自身の力量についての意識が最初に見られるのは、15 番である。

- (1) And, all in war with Time for love of you,
As he takes from you, I engraft you new. (Sonnet 15, ll. 13-14)

Sonnets では、1 番で青年を「美の薔薇」(beauty's rose (Sonnet 1, l. 2)) に喩えることに始まり、青年を植物、とりわけ薔薇として描く比喩が随所に見られるが（大森 2023、p. 2 および大森 2025、p. 8 参照）、15 番では、人間を植物と見なすメタファー認識を明示する (When I perceive that men as plants increase, (ibid. l. 5))。若々しい樹液が巡るよう若さを誇る人が絶頂に達して衰え行く様を描き (Vaunt in their youthful sap, at height decrease, (ibid. l. 7))、(1) に引用した 13-14 行目では、愛する青年を奪っていく〈時〉と戦うために、青年に接ぎ木を施す (engraft) と述べ、青年を〈植物〉に、語り手自身を接木をする〈園芸家〉に喩え、詩作を通して限りある命の継続を試みようとする語り手の意志を表現している⁶ (Burrow ed. 2002, p.410 および大森 2025、pp. 7-9 参照)。

このような意志の表明は、詩の中に命を植えつけることができるという、自らの詩人としての力量への高い自己評価の反映であると言える。*Sonnets* の冒頭 1 番から 17 番までは *Marriage Sonnets* と呼ばれる (Wilson ed., 1966, p. 89 参照)。美しい青年の命をいつかは奪ってしまう〈時〉に抗うため、青年に、結婚して青年の美しさを受け継ぐ子供を作るよう勧めるというのが結婚ソネット群の一貫した趣旨である。どれだけ言葉を尽くしても語り手の勧めを受け入れず、いっこうに結婚を考えない青年に対し、自信のある詩作の力を武器として、〈時〉との戦いに語り手自らが参戦し、勝利への自信を示したのが (1) に引用した 15 番である。

ところが、続く 16 番では、15 番で見せた自信が影をひそめ、弱気が顔を出す。この揺れる思いは 1 行目冒頭の “But” に表れている。

- (2) But wherefore do not you a mightier way
Make war upon this bloody tyrant Time,
And fortify yourself in your decay
With means more blessed than my barren rhyme?
Now stand you on the top of happy hours,
And many maiden gardens, yet unset,
With virtuous wish would bear your living flowers,
Much liker than your painted counterfeit:
So should the lines of life that life repair,
Which this time's pencil or my pupil pen
Neither in inward worth nor outward fair
Can make you live yourself in eyes of men:
To give away yourself keeps yourself still,
And you must live drawn by your own sweet skill. (Sonnet 16)

上述のように、詩集全体を通して初めて自らの詩に明示的に言及したのがこの 16 番 4 行目であるが、ここで語り手は “barren”⁷ という修飾語を用い、残酷な暴君である〈時〉と戦う方法として、「私の不毛な詩」などよりもっと幸せな方法、すなわち結婚して子どもを残すという方法で、衰頹へと向かう自分の身を守ろうと何故しないのか、と青年に詰問する。一つ前の 15 番で「接木する」(engraft) という比喩で生命を育む詩の力を力強く表現していたその矢先に、自らの詩は「不毛」だ、すなわち、命を生み出す力がないと否定的な評価をくだすこの措辞に対し、Burrow ed. (2002,

り手が自信のなさを訴えても、これだけレトリックに富む名作を生み出し、高い技量を発揮しながら「自信のなさ」を表現している Shakespeare 自身が実際に自信喪失に陥っていると捉えるべきではない。ここではあくまでも *Sonnets* を一つのフィクションとし、その中の登場人物の一人として語り手を捉える。大場 (編注訳 2018, p. xiii) は *Sonnets* を二幕構成の劇作品と見なすが、それは西脇順三郎の「ソネットを純粋に文学作品として評価する場合は自伝的興味をはなれて、それらがみな作者の創作でなければならない」という見解をふまえたものである。

⁶ Burrow ed. (2002, p.410) はこの 14 行目の “engraft” について “I renovate and eternize you through poetry.” と解釈している。

⁷ 川西 (編注 1971, p. 91) はここでの “barren” について「(君は子を産めるが私の詩は) 何物をももたらさない」と解釈している。

p. 412) は「衝撃的」と評している。⁸ 語り手はさらに、10 行目で自らの筆力を「つたないペン」(my pupil pen)⁹と卑下し、「内面の価値にしろ、外見の美にしろ、とうてい、生けるままのきみの姿を人の眼に伝えることができない。」(11-12 行目)と、自らの詩人としての力量を否定する。この否定的自己評価が、13-14 行目のカプレット、「結婚してきみをあたえるのが、その姿をとわに保つすべだ、きみはおのれの技で、おのれを描いて、生きねばならない」につながっていく。¹⁰

さらに続く 17 番では、冒頭 1 行目に “my verse” という語が、末尾 14 行目に “my rhyme” が置かれ、語り手自身の詩の力が 17 番の主要テーマとなっていることがわかるが、¹¹ ここでも語り手は自分の詩についての自信のなさを出す。

- (3) Who will believe my verse in time to come
If it were filled with your most high deserts?
Though yet, heaven knows, it is but as a tomb
Which hides your life, and shows not half your parts.
If I could write the beauty of your eyes,
And in fresh numbers number all your graces,
The age to come would say ‘This poet lies:
Such heavenly touches ne’er touched earthly faces.’
So should my papers (yellowed with their age)
Be scorned, like old men of less truth than tongue,
And your true rights be termed a poet’s rage,
And stretchèd metre of an antique song.
But were some child of yours alive that time,
You should live twice, in it, and in my rhyme. (Sonnet 17)

2 行目では「かりに、私の詩がきみのたぐいない美質を言いつくしたら」、5-6 行目では「かりに私とその眼の美しさを書きあらわし、書きつくし、生氣あふれる詩のなかできみの好ましさを数えあげても」と、語り手は自らが書く詩の力量について 2 つの if 節で仮定する。これらの仮定において、語り手の詩は愛する青年の美質を余すところなく表現する力をもつものとして描かれるが、それは “If it were filled ...” および “If I could write ...” が示すとおり、仮定法で述べられた反実仮想に過ぎない。現実には「この詩はまだ、きみの生をおおいかくす墓のようなもの、きみの資質のなかばも示してはいない」(3-4 行目)のである。自らの詩の喩えとして語り手が想起する〈墓〉という概念は、青年の命を〈時〉の手から守り、生かし続けることが絶対的な目標である語り手にとって、その目標と真逆の方向に位置する概念であり、自分の詩を目標達成のために役立たせる自信がないという語り手の弱気を示している。

さらに語り手は、これらの if 節で示された仮定が仮に実現し、自らの詩が青年の美質を書き尽くすことができたとしても、後世の人たちはそれを信じず、「この詩人は嘘つきだ」(7 行目)と言うだろう、「私の詩集は(年をへて黄ばみ)、軽蔑されるだろう」(9-10 行目)、青年への当然の讃辞が詩人の「たわごと」(rage (l. 11))、「大げさな調べ」(stretchèd metre (l. 12)) だと言われるだろう、と悲観的な想像を展開する。

しかし 13-14 行目では、暗い想像が一転し、「だが、その時にきみの子供が生きていれば、きみは二度生きることになる。子供のなかで、私の詩のなかで。」という明るい希望が語られる。高松(1986, p. 222)はこの詩について、「自分の詩はつたなく、若者の美を表現しきれない、という十六番の主題を受けついでいるが、同時に、自分の詩は後世に伝えられて、若者の美を語りつづける、という逆の主張も混入している。」と述べる。高松の指摘のとおり、17 番における語り手の自意識

⁸ “[B]arren rhyme is the first explicit mention of poetry in the sequence. It shockingly denies the vitality implicitly granted to verse by *engraft* in 15.14, and links poetry with one of the most negatively charged adjectives in the early part of the sequence.” (Burrow ed. (2002, p. 412))

⁹ Schmidt (1971, vol. II, p. 918) はここでの “pupil” の語義を “Adjectively, = not of age, unripe” と記している。

¹⁰ 川西(編注 1971, p. 91) は 14 行目について「画家や詩人の手に頼らず、自分で子を産むことによって自分の似姿を描き再現するのが最善の方法である、との意。」と解釈している。

¹¹ 本プロジェクト報告書掲載の渡辺秀樹名誉教授の論文では、この 17 番において、「冒頭行と最終行に my verse と my rhyme の類義語言換えがあつて epanalepsis 構造を取り、その自分のソネットこそが篇のテーマとなっている」と指摘している。

は、悲観のみではなく、“You should live ... in my rhyme.”と述べている以上、自らの詩の力について肯定的な見方もしていると言えよう。¹² ただし、その肯定的評価は、あくまでも青年が結婚し、子供を残してくれることが条件となる。13行目の条件節 “were some child of yours alive that time”からは、詩の説得力を裏付ける証拠となってくれる美しい子供の存在なくしては、詩の価値は後世に認められない、という心もとなさがうかがえる。Burrow ed. (2002, p. 415) は、14行目の “rhyme”という語は 1590 年までには “poem” という語とは対照的な侮蔑の意味をもつ語として用いることができるようになったため、ここでは（自らの詩についての）楽観的な見方を相殺するような、控えめに肩をすくめるような態度が表れている、との興味深い鑑賞を記している。¹³

青年に結婚を勧める Marriage Poems はここで終わりを迎え、18 番からは、〈時〉との戦いのために青年の子供に期待するという発想は二度と出なくなる。青年が結婚し子供をもうけることにはもはや期待している場合ではない、と覚悟をきめたかのようなのである。「きみを夏の一日に比べたらどうだろう。」という明るく柔和な表現で始まる 18 番では、16 番、17 番に見られた弱気から一転、自らの詩の力強さが高らかに主張される。

- (4) Shall I compare thee to a summer's day?
Thou art more lovely and more temperate:
Rough winds do shake the darling buds of May,
And summer's lease hath all too short a date;
Sometime too hot the eye of heaven shines,
And often is his gold complexion dimmed;
And every fair from fair sometime declines,
By chance or nature's changing course untrimmed:
But thy eternal summer shall not fade,
Nor lose possession of that fair thou ow'st;
Nor shall Death brag thou wand'rest in his shade,
When in eternal lines to time thou grow'st.
So long as men can breathe or eyes can see,
So long lives this, and this gives life to thee. (Sonnet 18)

18 番の前半では、冒頭で青年と対比された「夏」が瞬く間に終わり（4 行目）、美しいものはすべて、いつかは美を失って朽ちる（7 行目）という「自然の推移」(nature's changing course (l.8))、すなわち有為転変、諸行無常の摂理を示す。一方、後半では、9 行目と 12 行目の 2 箇所 “eternal” という語を用い、¹⁴ 前半とは真逆の不変不滅という概念を提示する。「しかし、きみが不滅の詩のなかで時と合体すれば、きみの永遠の夏はうつろうことはない。いま手にしているその美しさを失うこともない。死神が、やつはわが影を歩んでいる、とうそぶくこともない。」(9-12 行目) と述べ、衰えることのない青年の永遠の夏 (eternal summer)、永遠に残る語り手の詩 (eternal lines) という、無常の摂理に反する事象を実現可能なものとして提示する。ここでは 17 番で示されたような仮定法はもはや用いられない。そして 13-14 行目では「人が息をし、眼が見うるかぎり、この詩は生きる。そして、この詩がきみにいのちをあたえる。」と、自らの詩を不滅の生命体と見なし、死すべき人間である青年に命を与える力を持つものとみなすメタファー思考が表現される。

同様に、続く 19 番では、「すべてを食いつくす時」(Devouring Time (Sonnet 19, l. 1)) の、あらゆる命を奪っていくという悪行を描いた後、語り手は引用 (5) のカプレットで、〈時〉に対し、「だが、極悪の罪をおかさばおかせ、老いた時よ。どんな危害を加えても、わが恋人はこの詩のなかでは永遠に若い。」という不敵な宣言をする。

¹² 大場 (編注訳 2018, p. 45) もこのカプレットを肯定的な意味をもつものとして解釈し、「17 篇の『結婚詩群』を締めくくるにふさわしい満々の自信と矜持。」と述べる。

¹³ “By 1590 rhyme could be used as a term of contempt, opposed to ‘poem’, so there is a modest shrug here to counterpoise the optimism.” (Burrow ed. 2002, p. 415)

¹⁴ 本プロジェクト報告書掲載の渡辺秀樹名誉教授の論文では、形容詞 eternal の意義について論じられ、eternal は神、天の属性であって (=immortal, heavenly)、temporal, ephemeral, earthly, mundane, mortal な人間やその業に用いられるべき語ではないことが指摘されている。また、渡辺 (2025, pp.31-32) では、第 18 篇で早くも宣言されていたソネットの永遠性こそが、実はソネット集の隠された主題であると論じられている。

- (5) Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong,
My love shall in my verse ever live young. (Sonnet 19, ll. 13-14)

引用 (3) と (4) と (5) から気づくことは、17 番、18 番、19 番ではそれぞれ語り手自身の詩を指す語に前置詞 “in” が配され (in my rhyme (Sonnet 17, l. 14)、in eternal lines (Sonnet 18, l. 12)、in my verse (Sonnet 19, l. 14))、〈容器〉のメタファーが用いられていることである。¹⁵ 17 番では、青年を収める〈器〉が、屍を収める〈墓〉から生きる命を収めるものへと変容する様子が示されている。18 番で〈時〉が青年の美しさを脅かす様子が「五月のいとおしむ花のつぼみを荒っぽい風が揺さぶり」(Rough winds do shake the darling buds of May, (Sonnet 18, l. 3)) という比喻で描かれていることをふまえて読むと、(3) と (4) と (5) において、語り手の作る詩は、内容物の劣化を防ぐカプセルの如く、〈五月の薔薇〉たる青年をその若い命を保たせたまま (live young (Sonnet 19, l. 14)) 封入し、その老化を食い止める働きをもつ〈器〉として捉えられていることがわかる。

このように、青年の生命を巡る〈時〉との戦いにおいて、結婚し子孫を残すという手段を講じようとしないう青年の前に、自らの詩を武器にすることを思いつく語り手であるが、その武器としての詩の力量については、肯定 (15 番) から否定 (16 番、17 番) へ、また肯定 (18 番、19 番) へと、語り手の自己評価に揺れが見られる。

3. 心は歌い、体は書く：身体行為としての表現

上述のように、語り手は、自分の詩の力を武器に〈時〉に宣戦布告をする一方で、自らの力量についての自信のなさが払拭されたわけではない。語り手の自信喪失は、よどみなく言葉が口から出てこないという事態を引き起こす。

- (6) As an unperfect actor on the stage
Who with his fear is put besides his part,
Or some fierce thing replete with too much rage,
Whose strength's abundance weakens his own heart;
So I, for fear of trust, forget to say
The perfect ceremony of love's rite,
And in mine own love's strength seem to decay,
O'er-charged with burden of mine own love's might:
O let my books be then the eloquence
And dumb presagers of my speaking breast,
Who plead for love, and look for recompense,
More than that tongue that more hath more expressed.
O learn to read what silent love hath writ:
To hear with eyes belongs to love's fine wit. (Sonnet 23)

23 番では、まず 1-4 行目で、舞台上で恐怖心にあおられて自分の役を忘れてしまう未熟な役者や、勢いだけが先走って気持ちが負けてしまう熱しやすいへぼ役者に自らをなぞらえ、5 行目から「私も同じことだ。自分に自信がないものだから、愛の儀式の口上をきちんと述べたてるのを忘れてしまう。おのが愛の力という重荷におしひしがれ、おのが愛の強さに心がなえてしまうらしい。」と自分の弱さを分析する。5 行目の “fear of trust” について、Wilson ed. (1966, p. 122) は、自分を信じていない、あるいは自信過剰になることが怖いという解釈に加え、「どのように受け止めてもらえるかわからない」という H. C. Beeching, ed., *The Sonnets of Shakespeare* (1904) の解釈を紹介し、観客の前に登場した俳優のようだと述べている。¹⁶ 相手に思いを告げるときの緊張感を、俳優が舞台上で声を出して表現する際に味わう緊張感と結びつける発想は、演劇を活動の場としてきた Shakespeare ならではの表現と言える。

そこで、口で言うこと (to say (l. 5)) のできない語り手は、自らの詩 (my books (l. 9)) に雄弁に語らせようとする。「ならば、わが詩こそ、この語らんとする胸のうちは言葉たくみに伝える無言の使者であってくれ。これならば、より多くをよりたくみに言いなす舌よりも、もっとみごとに

¹⁵ 〈容器〉のメタファーの構造および身体性については Lakoff (1987) 第 17 章を参照。

¹⁶ “for fear of trust mistrusting myself, or fearing to be overconfident, ‘not knowing what reception I shall get’ (B.) – like an actor as he appears before the audience.” (Wilson ed. (1966, p. 122))

愛を訴え、愛の酬いをもとめるだろう。さあ、沈黙の愛が書いたものを読みとってくれ。眼で聞くことこそ、愛が生んだすばらしい知恵だ。」(9-14 行目)と述べる語り手にとって、詩は、「舌」(tongue (l. 12)) と対比され、音声を伴うことなく (dumb (l. 10) および silent (l. 13))、しかも説得力のある表現手段 (eloquence (l. 9)) である。

舌を使って音声で表現することができないからと言って、語り手には、言うべき言葉を持っていないというわけではない。むしろ、胸の内には言葉が溢れていることが “speaking breast” (l. 10) に表れている。さらに 29 番では、青年へのこの溢れる思いを、夜明けの雲雀のさえずりに喩える。

- (7) Yet in these thoughts myself almost despising,
Haply I think on thee, and then my state
(Like to the lark at break of day arising)
From sullen earth sings hymns at heaven's gate. (Sonnet 29, ll. 9-12)

29 番前半では、語り手は自分の身の上をみじめに思い、自らの運命を呪い、幸運も、美貌も、友人も、学識も、才能も他人と比べて欠如していることを嘆く。ところが (7) に引用する 9-12 行目では、「だが、こんな思いで自分に愛想がつかかけると、幸いにも、私はきみのことを思う。するとわが心は、夜明けがたに暗い大地から舞いあがる雲雀のように、天の門口で讃歌をうたいたすのだ。」と、その心情が大きく変化する。空高く舞い上がり、長い時間絶え間なく伸びやかにさえずり続ける雲雀の鳴き声の喩えは、青年を心に思い浮かべた時の幸福感のみならず、青年への愛の言葉が心の中に豊かに溢れかえっていることを表している (11-12 行目の表現、とりわけ語り手の青年への讃辞を喩える “hymn” という表現の背景には〈語り手は雲雀であり信者、青年は昇る太陽であり神〉というメタファーがあることについて、大森 (2025, p. 3) が詳述している)。

心の中では雄弁に語り (speaking breast (Sonnet 23, l. 10))、あるいは歌い (sings (Sonnet 29, l. 12)) ながらも、口で語ることは苦手な語り手にとって、自らの思いを表出するための身体行為は、舌を使って話すことではなく手を使って書くことである。この語り手自身の意識を明示するのが、黒いインク、あるいは黒いインクで書いた筆跡という、筆者の詩を表すメトニミー的措辞である。

- (8) Against my love shall be as I am now,
With Time's injurious hand crushed and o'er-worn,
When hours have drained his blood and filled his brow
With lines and wrinkles, when his youthful morn
Hath travelled on to age's steepy night,
And all those beauties whereof now he's king
Are vanishing, or vanished out of sight,
Stealing away the treasure of his spring:
For such a time do I now fortify
Against confounding age's cruel knife,
That he shall never cut from memory
My sweet love's beauty, though my lover's life.
His beauty shall in these black lines be seen,
And they shall live, and he in them, still green. (Sonnet 63)

63 番は、語り手の愛する青年がやがて老化へ (to age's steepy night (l. 5)) と向かう時が必ず来ることを覚悟し、その時に備えて語り手が防衛策を講じる (For such a time do I now fortify (l. 9)) ことを宣言する詩である。若者を老化へと向かわせるものとして、語り手が意識しているのが「時の神の邪悪な手」(Time's injurious hand (l. 2)) である。その手は若々しかった青年の額に皺を刻み付ける (filled his brow / With lines and wrinkles (ll. 3-4))。

〈時〉の手に対する敵対意識は 60 番にも見られる。60 番も同様に、〈時〉が若者の美しい額に幾重もの皺を掘り起こし (Time doth transfix the flourish set on youth, / And delves the parallels in beauty's brow, (Sonnet 60, ll. 9-10))、鎌であらゆるものを刈り取ってしまう (And nothing stands but for his scythe to mow. (ibid. l. 12)) 様を描き、その「酷い手」に対抗して、語り手自身の詩が来たるべき世まで持ちこたえて青年のすばらしさを讃え続ける (And yet to times in hope my verse shall stand, / Praising thy worth, despite his cruel hand. (ibid. ll. 13-14)) と予言する。〈時〉の手に抗う語り手の「詩」を指す表現は 60 番では “my verse” であるが、63 番ではさらに色彩語を伴い、“these black lines”

(Sonnet 63, l. 13)) となっている。黒色の詩行という具体的、微視的な表現からは、紙の上に見える文字のインクの黒い色、インクを紙に定着させていくペン先、ペンを握り締めて文字を書きつけていく詩人の手が連想される。“these black lines” が示す黒い筆跡は、美しい額に皺という lines (4 行目) を刻み付ける〈時〉の手に対して闘争心を燃やし、自らの手で紙に文字の lines を刻むように筆圧を込めて書くという語り手の生々しい身体行為の痕跡である。

63 番 13 行目の “these black lines” の前に前置詞 “in” が配された、「彼の美はこの黒い文字のなかに見られるであろう」(His beauty shall in these black lines be seen,)¹⁷ という表現は、上述の “in my rhyme” (Sonnet 17, l. 14)、“in eternal lines” (Sonnet 18, l. 12)、“in my verse” (Sonnet 19, l. 14) と同様、〈容器〉のメタファーを用いたものである。前節で、18 番では〈五月の薔薇〉として青年をとらえ、17 番、18 番、19 番では語り手が書く詩を青年の命を保たせたまま封入する〈器〉としてとらえるというメタファーの対応関係を指摘したが、63 番にも同じ対応関係が見られる。14 行目、“And they shall live, and he in them, still green.” では、語り手は自らの詩という〈容器〉の中で青年が「とわに緑」であることを念じている。

Burrow ed. (2002, p. 506) は “still green” を「永遠の命を保ち美しい」(permanently alive and fresh)、「生命力に満ちている」(full of vitality) の意味の成句だと解説する。Duncan-Jones ed. (1997, p. 236) は “green” からは「未熟さ」(rawness and unripeness) も連想されると述べる。これらの注釈書が示す “green” の慣用的意味は、すべて、成長過程にある植物の若々しい緑色に由来すると考えられる。18 番、19 番を参照しながら 63 番を読むと、13-14 行目は、青年の美しさがこの詩によって後世にも語り継がれるという語り手の願いと、語り手の詩行の黒いインクの文字が〈容器〉となり、その中に、葉や茎の緑が鮮やかな若々しい薔薇の花が封じ込められ命を保つという状況とのメタファー的対応関係が浮かび上がってくる。この「緑」の色とインクの「黒」の配色が鮮やかである。さらに、(3) に引用した 17 番の、語り手の詩が書かれた紙が黄ばんだ様子を示す描写 (“So should my papers (yellowed with their age)” (Sonnet 17, l. 9)) を対比すると、詩を記した紙が経年劣化で黄ばみ、古びようとも、そこに書かれた詩と、詩が描く青年は、文字の鮮やかな黒色と薔薇の緑に象徴されるように若々しいままだ、という色彩のメタファーの構造的にも観察できる。

65 番でも同様に、語り手の詩の「中で」青年が永遠に輝くという、〈容器〉のメタファーに由来する表現が見られる。

- (9) Since brass, nor stone, nor earth, nor boundless sea,
But sad mortality o’ersways their power,
How with this rage shall beauty hold a plea,
Whose action is no stronger than a flower?
O how shall summer’s honey breath hold out
Against the wreckful siege of batt’ring days,
When rocks impregnable are not so stout,
Nor gates of steel so strong, but time decays?
O fearful meditation; where, alack,
Shall Time’s best jewel from Time’s chest lie hid?
Or what strong hand can hold his swift foot back,
Or who his spoil of beauty can forbid?
O none, unless this miracle have might,
That in black ink my love may still shine bright. (Sonnet 65)

65 番では、引用 (8) の 63 番 13 行目の “in these black lines” よりもさらに微視的になり、文字の黒いインクそのものが〈容器〉となり、黒いインクの「中で」(in black ink (l. 14)) 語り手が愛する青年が明るく輝き続けるというヴィジョンが示される。ここでの青年には薔薇以外に「宝石」(jewel (l. 10)) という喩えも用いられる。「時の櫃」(Time’s chest (l. 10)) という〈容器〉¹⁸ に返すのではなく、自らの〈容器〉の中に、〈宝石〉の如き青年を、その命を輝かせたまましまっておこうとする

¹⁷ 63 番 13 行目の “lines” は “verses” を意味すると考えられる (Schmidt 1971, vol. I, p. 656 参照) が、高松 (1986) は “black lines” を「黒い文字」と訳し、大場 (編注訳 2018, p. 143) も「黒の文字の連なり」と訳している。「文字」という訳語の選択には、ペンを握った手によって書きつけられる黒々とした筆跡に対する着目を感じられる。

¹⁸ Booth ed. (1977, p. 247) は、65 番 10 行目の “chest” を “coffer, jewel casket (time’s chest would be a coffin)” と解釈している。屍を収める〈棺〉の比喩には、(3) に引用した 17 番の “tomb” の比喩との類似性を感じられる。

のである。しかしこのヴィジョンは、語り手にとって「奇跡」(miracle (l. 13)) である。ありとあらゆるものを破壊し尽くす(時)の猛威の前には、真鍮版も石碑も大地もはてしない海も(1行目)、頑丈な岩も鉄づくりの城門も(7-8行目)、耐えることはできない。まして青年の「一輪の花のいのちほどの力しかもたぬ美」(3-4行目)が耐えられるわけがない。5行目の summer's honey breath も、夏に咲く花、おそらく薔薇の甘い香りになぞらえた青年の芳しい命の息づかいを表している。青年の死すべき運命を覆すことの困難さを、か弱い「一輪の花」(a flower (l. 4)) の喩えで表すことにより、自らの詩の力で奇跡を起こしたいという語り手の悲壮な願いを表現していると言える。

4. 自信喪失の要因と競争意識

前節で述べたように、よどみなく口から言葉が出てこないという事態は、語り手自身の力量についての自信のなさ起因するものである。では、語り手の自信を失わせる要因は何なのか。

26番では、自らの知恵 (wit) の貧弱さに言及する。

- (10) Duty so great, which wit so poor as mine
May make seem bare, in wanting words to show it, (Sonnet 26, ll. 5-6)

語り手は、「忠誠心はきわめて大きい、知恵のほうが貧弱で、表現の言葉がでてこない。それで裸同然のかっこうをしている。」と述べ、自らの言葉が欠乏していて (wanting)、それは知恵の貧弱さ (wit so poor) に起因するものとみなしている。

このように自分の知恵を貧弱だと思わせてしまう原因は、優れた技量をもつ当代詩人たちの存在である。32番では自らの詩を「つたなくも、粗雑な」(poor, rude (l. 4)) と形容し、他の詩人たちの優れた技量を意識する。

- (11) If thou survive my well-contented day,
When that churl Death my bones with dust shall cover,
And shalt by fortune once more resurvey
These poor, rude lines of thy deceased lover,
Compare them with the bett'ring of the time,
And, though they be outstripped by every pen,
Reserve them for my love, not for their rhyme,
Exceeded by the height of happier men. (Sonnet 32, ll. 1-8)

Burrow ed. (2002, p.444) は5行目の “bett'ring of the time” を「当代の(語り手より)優れた詩作」(the superior productions of the present)、8行目の “the height” を「優れた成果」(the high achievement) と解釈している。当代の詩人たちと自分自身の技量を比較し、自分は彼らに到底及ばないという語り手の意識は、6行目の “outstripped” および8行目の “exceeded” という語にも表れている。才能あるライバル詩人に対する劣等感は、80番にも見られる。

- (12) O, how I faint when I of you do write,
Knowing a better spirit doth use your name,
And in the praise thereof spends all his might
To make me tongue-tied speaking of your fame. (Sonnet 80, ll. 1-4)

語り手が愛する青年の名を自らより優れた詩人 (better spirit (l. 2))¹⁹ が挙げ、その名を讃えるのに全力を尽くしていることを意識し、語り手は怖気づき (faint (l. 1))²⁰、舌が金縛り (tongue-tied (l. 4)) になってしまう。2行目の “your name” は、4行目の “your fame” と脚韻を成して響き合う。²¹ 青年の名を語ることは青年の名声と結びつくため、語る側の力量が問われるのである。

“tongue-tied” は、ライバル詩人に自分が勝てないという強い思いが引き起こす身体反応を表す語である。第3節では、口で流暢に語ることの苦手な語り手が手を使って書くことを表現手段とす

¹⁹ Duncan-Jones ed. (1997, p. 80) は “a better spirit” について “a better spirit suggests both a superior being and a more inspired writer, supported by a more powerful spirit than the sick Muse of 79.4” と解釈している。

²⁰ Duncan-Jones ed. (1997, p. 80) は “faint” について “quail, lose heart” と解釈している。

²¹ Sonnet 80 の “name” と “fame” の脚韻と意味の関連性については、渡辺秀樹名誉教授より指摘いただいた。

る様を観察したが、ここでは、書くこと (write (l. 1)) さえもライバル詩人を意識して怯んでしまう様子を、〈書くこと〉を〈話すこと〉に喩えるメタファーを通して表現している。

技量の優れたライバル詩人に対する語り手の怯えは、一つ前の 79 番にも見られる。

- (13) Whilst I alone did call upon thy aid
My verse alone had all thy gentle grace,
But now my gracious numbers are decayed,
And my sick Muse doth give another place.
I grant (sweet love) thy lovely argument
Deserves the travail of a worthier pen,
Yet what of thee thy poet doth invent
He robs thee of, and pays it thee again.
He lends thee virtue, and he stole that word
From thy behavior; beauty doth he give
And found it in thy cheek; he can afford
No praise to thee but what in thee doth live. (Sonnet 79, ll. 1-12)

1-4 行目で、青年の優しい恩恵を一身に受けていた以前と異なり、「いまは、私の優雅な詩もおとろえて、わが病める詩神は他人に座をあけわたす。」と述べる語り手は、自らの詩作品や詩作の才能を “decayed” (l. 3) や “sick Muse” (l. 4) と〈病み衰える生命体〉のメタファーで捉える。

しかし、語り手は自らの詩の力量を卑下するだけでは終わらない。5 行目以降では、ライバル詩人のりっぱな (worthier (l. 6)) 詩は、青年に備わったものをただ盗んで (robs (l. 8)) 返したものに過ぎず、その言葉は青年の振舞いから盗んだ (stole (l. 9)) ものだとする。一見優れているように思えるライバル詩人の表現の価値に対し、〈窃盗〉のメタファーを用いて疑問を呈するのである。

さらに、85 番では、ライバル詩人への競争意識を前面に出す。

- (14) My tongue-tied Muse in manners holds her still,
While comments of your praise, richly compiled,
Reserve their character with golden quill
And precious phrase by all the Muses filed.
I think good thoughts, whilst other write good words,
And like unlettered clerk still cry ‘Amen’
To every hymn that able spirit affords,
In polished form of well-refined pen.
Hearing you praised, I say ‘’Tis so, ’tis true’,
And to the most of praise add something more,
But that is in my thought, whose love to you
(Though words come hindmost) holds his rank before.
Then others for the breath of words respect;
Me for my dumb thoughts, speaking in effect. (Sonnet 85)

1 行目で、(12) に引用した 80 番にも見られる “tongue-tied” という語を語り手は再度用い、自らの訥弁を、「修辞もはなやかに、詩の女神ら総がかりで彫琢した珍奇な言葉をつらね、黄金の筆をもって、つぎつぎに書きつづられてゆく」(2-4 行目) ライバル詩人たちの雄弁な詩作と対比する。その一方で、他の詩人たちは good words を書くのに対し、自分は good thoughts を心に抱く (5 行目) とし、自らの心に抱く愛の思いは他の誰にも負けない、すなわち「言葉では後れをとっても、心のなかでは、きみへの愛は先頭きっているのだ。」(11-12 行目) と力強く宣言する。

訥弁ゆえに自信を喪失しているはずの語り手が、12 行目で “hindmost” や “rank before” という〈競走〉のメタファーを用いて他の詩人たちへの対抗心を燃やすことができるのはなぜなのか。それは、「黄金の筆」(3 行目) と称する他の詩人たちの力量の程に対し、その実、語り手は冷徹な評価をくだしているからである。その評価態度は、遡って 82 番、83 番に既に表れている。

- (15) And their gross painting might be better used
Where cheeks need blood: in thee it is abused. (Sonnet 82, ll.13-14)

- (16) I never saw that you did painting need,
 And therefore to your fair no painting set.
 I found (or thought I found) you did exceed
 The barren tender of a poet's debt; (Sonnet 83, ll. 1-4)

引用 (15) および (16) が示すように、他の詩人たちが詩の中で青年を称讃する言葉を語り手は〈厚化粧〉に喩える。Burrow ed. (2002, p. 544, p. 546) は 82 番 13 行目の “gross painting” の 3 重の意味（「化粧に似た粗野で人工的な飾り」、「下手な絵画的表現」、「過度な修辭的裝飾」）²² を指摘し、83 番 1 行目の “painting need” については「化粧をする必要がある」という意味だと解釈し、82 番 13-14 行目を受けたものとしている。²³ 語り手は、そのような厚化粧は、頬に血の気がない人にはともかく、語り手が愛する青年には不要なものともなし（82 番 14 行目）、「詩人が恩義に報いようとて、へたな讃辞をささげても、きみはそれを超えていた。超えていると私は思った。」（83 番 3-4 行目）とし、華やかな技巧に富んだライバル詩人たちの美辭麗句を空疎なものとして批判する。さらに、83 番 10 行目では、自分自身の訥弁を「わが最大の誇り」と自賛する。

- (17) This silence for my sin you did impute,
 Which shall be most my glory, being dumb: (Sonnet 83, ll. 9-10)

これら (13) から (17) の引用からうかがえるのは、語り手はこの詩集の中で、自信喪失を示すような言葉を時折発しながらも、自分自身を実は強く肯定しているということである。語り手の卑下は、ライバル詩人たちの見た目の華やかな化粧のごとき修辭的技巧に対し、自らの詩の言葉が華麗さに欠けるという表面的な事柄に対するものに過ぎず、その裏には、ライバル詩人たちに対する競争意識とともに、自らの詩人としての強い自負が垣間見える。

5. 自負心に力を与える表現法

では、時に舌が金縛りにあい、沈黙を余儀なくされる語り手が、青年への愛をどのようにして語るのか。語り手が用いる強力な方法は、「同じ一つのことだけを書く」ということである。

- (18) Why is my verse so barren of new pride,
 So far from variation or quick change?
Why with the time do I not glance aside
 To new-found methods, and to compounds strange?
Why write I still all one, ever the same,
 And keep invention in a notèd weed,
 That every word doth almost tell my name,
 Showing their birth and where they did proceed?
 O know, sweet love, I always write of you,
 And you and love are still my argument;
 So all my best is dressing old words new,
 Spending again what is already spent:
 For as the sun is daily new and old,
 So is my love, still telling what is told. (Sonnet 76)

76 番では第一 4 行連句（1-4 行目）と第二 4 行連句（5-8 行目）で合計 3 つの why 疑問文を提示し、語り手は自らの詩に斬新さや修辭的技巧が欠けていることに「なぜ」と自問しているように見える。しかし実際には文字通りの意味でその理由を思案しているわけでも、自己嫌悪や自己否定に陥っているわけでもない。1 行目では自らの詩を “barren” という語で形容している。この語は (2) で引用した 16 番 4 行目、“my barren rhyme” にも見られるが、青年に結婚を勧める 16 番では自らの詩に命を生み出す力がないという意味であったのに対し、ここでは「新奇で、華麗な修辭」(new pride (l. 1)) ²⁴ が欠如しているという意味である（76 番の “barren” の文脈をふまえた意味に

²² “gross painting (a) crude artificial ornaments resembling make-up; (b) bad pictorial representation; (c) excessive rhetorical ornamentation.” (Burrow ed. 2002, p. 544)

²³ “painting need have need of make-up, continuing the argument of 82.13-14.” (Burrow ed. 2002, p. 546)

²⁴ Duncan-Jones ed. (1997, p. 262) は “pride” について OED を参照して “splendour, ostentatious adornment” という

については、渡辺 (2025, p. 30) を参照)。²⁵ 新奇で華麗な修辞、すなわち表現の変化や素早い転換 (2 行目)、新たな表現法や見慣れぬ言葉の組み合わせ (4 行目) は、ライバル詩人たちの得意技である。その得意技を語り手は、この 76 番の後、82 番および 83 番で、(15) や (16) で見たように〈厚化粧〉の比喻で否定的に描くのである。83 番では、“I found (or thought I found) you did exceed / The barren tender of a poet’s debt;” (Sonnet 83, ll. 3-4) と、他の詩人による青年への「へたな讃辞」を表す語として“barren” が用いられ、“barren” が描く対象が語り手自身の詩からライバル詩人の詩へと転換していることがわかる。この流れをふまえると、(18) の 1 行目、“Why is my verse so barren of new pride,” は反語的表現であり、自負の裏返しであることがうかがえる。²⁶ 5 行目からの why 疑問文、「なぜ、私は相変わらず一つことばかりを書きつづけ、詩の着想にいつもながらの着古しをきせておくのか。」(5-6 行目) も同様に、実は自問ではなく、「なぜ同じ一つのことばかり書くと思う？ 実はこれこそが私の技なのだよ」と誇らしげに主張していると解釈できる。²⁷ 同じ一つのことばかりを書き続け、「古い言葉を新しく装い、以前に使ったものを、また、使う」(11-12 行目) という自身の詩作態度を、語り手は太陽に喩え、「太陽は日々新しくて古い。私の愛もそれと同じ。すでに語ったことを、いつも語りつづける。」(13-14 行目) と述べる。29 番からの引用 (7) では、青年を東の空から昇り初める太陽に喩えて神格化し、自らを神に捧げる賛美歌を歌う雲雀に喩えているが、(18) では自らの詩を日々古くて新しい太陽に喩え、同じことを語り続ける自らの詩を、同じ反復運動を永遠に繰り返す太陽の不変性に匹敵するものとして特徴づけるのである。〈太陽〉のメタファーからは、語り手の強い自負心がうかがえる。では、語り手が書き続けるといふ、同じ一つのこととは具体的に何なのか。(18) で見た 76 番では、「私はいつも きみを書く」(I always write of you, (1,9)) と述べられている。青年という同じ一つの対象について書くという内容は 105 番、108 番にも見られる。

(19) Let not my love be called idolatry,
Nor my beloved as an idol show,
Since all alike my songs and praises be
To one, of one, still such, and ever so.
Kind is my love today, tomorrow kind,
Still constant in a wondrous excellence;
Therefore my verse, to constancy confined,
One thing expressing, leaves out difference.
‘Fair, kind and true’ is all my argument,
‘Fair, kind, and true’ varying to other words;
And in this change is my invention spent,
Three themes in one, which wondrous scope affords.
Fair, kind, and true have often lived alone,
Which three till now never kept seat in one. (Sonnet 105)

(20) What’s in the brain that ink may character,
Which hath not figured to thee my true spirit?
What’s new to speak, what new to register,
That may express my love, or thy dear merit?
Nothing, sweet boy; but yet, like prayers divine,

語釈をつけている。

²⁵ 渡辺 (2025, p. 30) は、「この第 76 篇で重視する表現は第 10 行の “you and love are still my argument” 「あなたと愛が常に私の詩のテーマだ」という断言である。つまり本篇の barren は「不毛」ではなく、all one 「唯一のこと」の意味である。」と述べている。さらに、本プロジェクト報告書においても、渡辺名誉教授は *Sonnets* における “barren” の非字義の意味について詳細に考察している。

²⁶ 大場 (編注訳 2018, p. 168) は 76 番について次のような興味深い解釈を示している。「この 76 はむしろ sonneteer としての Sh の自負の作として裏から読みたい。(中略) 用語や表現の工夫はだれにでもできる、自分の試みているのはそんな小手先の技巧ではない、どうだ、この逆転の恐ろしさがわかるか——Sh の満々の自信漲る 1 篇。」

²⁷ 同じことを繰り返して書く手法は、実にレトリックの重要な技法の一つである。文学の言語において、繰り返しの技法はテキストレベル、語彙レベル、音韻レベルに広範に見られ、この技法は古英詩にまで遡る (Wales 1989, p. 402 参照)。Shakespeare の *Sonnets* における繰り返しのレトリックについては渡辺名誉教授の一連の研究 (2021, 2025、および本プロジェクト報告書掲載論文) において詳細に分析されている。

I must each day say o'er the very same,
 Counting no old thing old, thou mine, I thine,
 Even as when first I hallowed thy fair name.
 So that eternal love in love's fresh case
 Weighs not the dust and injury of age,
 Nor gives to necessary wrinkles place,
 But makes antiquity for aye his page,
 Finding the first conceit of love there bred,
 Where time and outward form would show it dead. (Sonnet 108)

(19) では「私の歌も讃美の言葉も、どれもこれも、一人にむかって、一人について、いつも同じ調子でうたい続ける」(3-4 行目)と述べ、青年が今日も明日も優しく、その見事な資質は恒常不変 (constant) である(6 行目)ため、語り手自身も恒常不変 (constancy) を保って一つのことを述べ続け(7-8 行目)、「美しく、優しく、真実の」がわが主題のすべてだ(9 行目)と語る。

(20) では、「何が頭に残っていよう」(1 行目)、「なんの目新しいことが語れよう、今さら何を書きえよう」(3 行目)と問いかけ、その問いに対し、「何もありはしないのだ、愛するものよ。私は神に祈るように、日ごと、一つことを繰り返すほかはない。言い古した言葉を古いとも思わずに、汝はわがもの、我はながものと、ちょうど最初にきみの美しい名を崇めた時のように。」(5-8 行目)と、76 番(引用(18))に見られた“new”と“old”の対比を反復しながら自ら答えを出す。大森(2005、p. 10)は、この 108 番 5-8 行目について、Burrow ed. (2002, p. 596)による指摘、すなわち、7 行目の「汝はわがもの、我はながもの」(thou mine, I thine)が旧約聖書「ソロモンの雅歌」2 章 16 節の“My beloved is mine, and I am his.”のエコーであること、8 行目の「きみの美しい名を崇めた」(hallowed thy fair name)が「マタイによる福音書」6 章 9 節の「主の祈り」の一節、“Our Father which art in heaven, hallowed be thy name”の引喩であることの指摘をふまえ、「語り手は聖書由来の表現を用いて、青年が神に匹敵する聖性をもつという認識を表現している」と考察したが、(18)に引用した 76 番の〈太陽〉のメタファー (the sun is daily new and old (Sonnet 76, l. 13))をふまえると、語り手は「語り手自身の」聖性をも意識していることがうかがえる。「汝はわがもの、我はながもの」という言い古した言葉を日毎 (each day (Sonnet 108, l. 6))繰り返すという反復動作は、その反復性において、太陽の日毎の反復運動に共通している。「時をへて外側が変り、愛も死んだと見えるその姿に、最初の愛の心が生まれ、そだったのを知る」という 13-14 行目の内容も、一日を経て西に沈み、死んだと見える太陽が、また東の空に昇り、新しい一日の最初の光を大地にもたらす姿と重ね合わせることができる。これが「永遠の愛は愛の青春の姿をたもちつづけ」る (eternal love in love's fresh case (l. 9))という宣言に説得力をもたせる。同じ一つの言い古した言葉を繰り返し書き続けるという反復行動により、語り手の愛が、〈太陽〉のごとき聖性を帯び、逆説的に、いつまでも古びることなく新鮮な姿を保つという永続性を獲得するのである。

6. 結びにかえて：響き合う “same” と “name”

かくして、「同じ」一つのことを書き続けるという、ライバル詩人たちの変化に富んだ華麗な修辞とは一線を画した表現法が、語り手の自負心に力を与え、ひいては語り手が詩を書く最大の目的、すなわち〈時〉の無情な手から青年の命を永続的に守ることに寄与する。語り手は 81 番で、“Your name from hence immortal life shall have,” (Sonnet 81, l. 5)と、青年の名が不滅の命を得ることを約束し、重ねて “You still shall live (such virtue hath my pen)” (ibid. 13)と述べ、青年は永遠に生きる、そういう力 (virtue)²⁸が語り手の筆にはあると宣言した。語り手にとって、詩の力の源は、語る事柄が同じであること、変わらぬことであり、それが詩の世界の中で対象に永遠不滅の命を与える。²⁹その意味で、(18)に引用した 76 番 5 行目、および (20)に引用した 108 番 6 行目の “same” という語は、語り手にとって最も重要な概念の一つを指す。

本誌に論文を寄稿されている渡辺秀樹名誉教授から、76 番と 108 番の “same” はともに、“name” と脚韻を踏んでいることを指摘いただいた。(18) および (20) を再読すると、“same” と韻を踏む行は 76 番では “That every word doth almost tell my name,” (l. 7)、108 番では “Even as when first I

²⁸ Schmidt (1971, vol. II, p. 1321) は Sonnet 81 番 13 行目の “virtue” の語義を “power, efficacy” と記している。

²⁹ 実際、語り手は *Sonnets* の中で、自らの詩の中で青年を永遠に生かそうとする決意を、同じ内容で何度も繰り返し表現し、「同じ一つのことを書く」ことを実践している。大森 (2023, pp. 11-12) 参照。

hallowed thy fair name.” (l. 8) である。前者では「私の名前」、後者では「きみ（＝青年）の名前」が、「同じ」と響き合っていることがわかる。この押韻には、何らかの意味があるのだろうか。

(4) に引用した 18 番は、Marriage Poems を終え、青年に結婚を勧める発想から脱却し、初めて自らの詩の力のみで〈時〉と対峙することを高らかに宣言した詩であった。この詩では、第 2 節で観察したように、青年と語り手の詩の「両方」を “eternal” という語で形容し、最終行では “So long lives this, and this gives life to thee.” と、語り手の詩と愛する青年の「両方」が生き続けることを予言している。(8) の 63 番 14 行目でも同様に、“And they [= these black lines] shall live, and he in them, still green.” と、語り手の詩行とそこに描かれた青年の「両方」の命の永続を念じている。

考えてみればその祈念は当然のことである。青年の名声を後世まで保たせるには、青年を収めた〈器〉たる詩も後世まで命を保ち続けねばならない。詩が残るということは、語り手も詩の作者として「名」を残すということである。“my name” と “thy fair name” が不変不滅を象徴する “same” と響き合うように語り手が押韻を仕組んだのは、自らと青年の両方を〈時〉の大鎌から守るための、いわば呪文のような音韻的戦略だと考えられる。それは、「眼で聞くことこそ、愛が生んだすばらしい知恵」(To hear with eyes belongs to love’s fine wit. (Sonnet 23, l. 14)、(6)を参照) という語り手の考えを实践した、詩の読み手の頭の中に呪文を響かせる工夫であるとも言えよう。語り手は 107 番で、死は自分に屈服するのだという確信、自分は死に逆らってこの「拙い」詩の中で生きるのだという決意を表明した。

(21) Now with the drops of this most balmy time
My love looks fresh, and death to me subscribes,
Since, spite of him, I’ll live in this poor rhyme,
While he insults o’er dull and speechless tribes.
And thou in this shalt find thy monument,
When tyrants’ crests and tombs of brass are spent. (Sonnet 107, ll. 9-14)

11 行目の “poor” という言葉には、もはや 32 番 4 行目で自らの詩を “These poor, rude lines” (引用 (11) を参照) と嘆いた時のような、自信喪失の影は全く見られない。むしろそこには、新奇で華麗な修辞を繰り出すライバル詩人に対する劣等感を逆手に取り、あるいは彼らの修辞の空疎さを見抜き、拙さ、朴訥さ、同じ古びた言葉を繰り返すことこそが〈時〉と戦うための最大の武器となることを確信した語り手の、詩の力に対する信頼と、青年への深い愛に裏打ちされた前向きな信念をうかがうことができる。そして私たち読者は、語り手の予言どおり、4 世紀の時を経てもこの詩集が生き続け、語り手と青年の愛の諸相が読み継がれていることに思いをいたし、詩人が自負した詩の力をまざまざと思い知らされるのである。

参考文献

- Burrow, Colin, ed. (2002) *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press.
- Booth, Stephen, ed. (1977) *Shakespeare’s Sonnets*. New Haven: Yale University Press.
- Duncan-Jones, Katherine, ed. (1997) *Shakespeare’s Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.
- Ingram, W. G. and Redpath, Theodore, eds. (1964) *Shakespeare’s Sonnets*. London: Hodder and Stoughton.
- 川西進 (編注) (1971) *Shakespeare’s Sonnets*. 東京：鶴見書店.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Johnson, Mark (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 大場建治 (編注訳) (2018) 『ソネット詩集』(研究社シェイクスピア選集別巻) 東京：研究社.
- 大森文子 (2018a) 「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.
- (2018b) 「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1』(鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編) 東京：ひつじ書房、175-104.
- (2021) 「Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、15-27.

- (2022)「時のメタファーとシェイクスピア」『英語のレトリック・日本語のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2021）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、17-29.
- (2023)「鏡と水仙：シェイクスピアの *Sonnets* における隠されたレトリック」『レトリックと文法（言語文化共同研究プロジェクト 2022）』（大森文子編）大阪大学大学院人文学研究科、1-14.
- (2025)「愛する人と自らと：シェイクスピアの *Sonnets* における関係性のメタファー」『“The Rhetoric IS the Message”「レトリックはメッセージである」—修辞・意味・認知の関わり—（言語文化共同研究プロジェクト 2024）』（アンドリュー・村上スミス編）大阪大学大学院人文学研究科、1-15.
- パノフスキー、エルヴィン（著）、浅野徹・阿天坊耀・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏（訳）（2002）『イコノロジー研究』（上）東京：筑摩書房.
- Schmidt, Alexander (1971) *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* Vols. I and II. New York: Dover Publications.
- 柴田稔彦（編）（2004）『対訳 シェイクスピア詩集』（岩波文庫）東京：岩波書店.
- 高松雄一（訳）（1986）『ソネット集（シェイクスピア作）』（岩波文庫）東京：岩波書店.
- 渡辺秀樹（2019）「英詩感情語メタファーの系譜第2回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト 2018）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、1-10.
- (2021)「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考：“when～then～”の繰り返しを中心に」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、2021、3-13.
- (2022)「Shakespeare における時の擬人化のヴァリエーション：英国 16～17 世紀詞華集を基礎資料にした Time の epithets と apostrophes 再考」『英語のレトリック・日本語のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2021）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、3-15.
- (2024)「英詩における主題提示音分散 (hypogram) 再考：Herrick と Wordsworth、Shakespeare と Blake の比較から」『こちら側とあちら側のレトリック—メタファー・翻訳・認知—（言語文化共同研究プロジェクト 2023）』（アンドリュー・村上スミス編）大阪大学大学院言語文化研究科、15-23.
- (2025)「Shakespeare’s *Sonnets* に見える繰り返しのレトリック (2) : *myself, thyself, and my verse*」『“The Rhetoric IS the Message”「レトリックはメッセージである」—修辞・意味・認知の関わり—（言語文化共同研究プロジェクト 2024）』（アンドリュー・村上スミス編）大阪大学大学院人文学研究科、17-33.
- Wales, Katie (1989) *A Dictionary of Stylistics*. London: Longman.
- Wilson, John Dover, ed. (1966) *The Sonnets (The New Shakespeare)*. Cambridge: Cambridge University Press.